

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新知故温

Shizuoka University of Art and Culture Library News



2013.12 Vol.23

平成25年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

『ドラクロワ色彩の饗宴』— ①

■図書館散歩

美術、見世物、——— ② 作り物をめぐる本

学生部長
文化政策学部 芸術文化学科 教授
片桐 弥生

人生の岐路で舵を切った本— ③

デザイン学部 生産造形学科 教授
田邊 英隆

■特集

わたしの1冊 ——— ④ ～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ——— ⑧



『ドラクロワ色彩の饗宴』

ウジェーヌ・ドラクロワ画・文／高橋明也 編・訳
二玄社 1999. (723.35/D 55)

フェルディナン・ヴィクトール・ウジェーヌ・ドラクロワ (Ferdinand Victor Eugène Delacroix, 1798年～1863年)は、19世紀初頭のフランスロマン主義を代表する画家です。彼の65年の生涯に描いた作品は油彩のタブロー画に限っても1000点余りにおよび、その他にも公共建築物の装飾画や、水彩、パステル、ペンや木炭による素描、石版画、エッチングなど様々なジャンルの作品を数多く手がけました。

ここで紹介する『ドラクロワ色彩の饗宴』は、「絵画のために最も大事なことは、眼のための饗宴である。」と言い放ったドラクロワの代表作を網羅し、日記や書簡などから厳選した言葉を平易に訳出して、その多彩な全体像に迫っています。

ドラクロワは、画家としての活動だけではなく、文筆家としての活動にも力を注いでいました。文芸誌『両世界』や『パリ』誌、『ラルディスト』誌など、幾つかの雑誌に美術評論や美術論、美術家論を執筆しています。歿後出版された『美術論集』(1923年)、『書簡集』(1880年刊)、『書簡集1822～63年』(1950年刊)などは、画家や批評家としてのドラクロワの活動と思索を物語るだけではなく、当時の文化を知るうえで重要な資料となっています。

参考文献

- ・『新潮世界美術辞典』. 新潮社, 1985. [703.3/Sh 61]
- ・『世界美術大事典 4』. 小学館, 1989. [703.3/Se 191/4]



学生部長
文化政策学部 芸術文化学科 教授
片桐 弥生
Katagiri Yayoi

本文中に登場した資料

小学館
「原色日本の美術」
[708/G 34]

講談社
「日本美術全集」
[708/N 77]

小学館
「日本美術全集」
[708.7/N 71]

木下直之[著]
『美術という見世物』
[702.16/Ki 46]
[081/KO 191/2021]

塙保己一[編]、太田藤四郎[補]
『看聞御記』
(続群書類従・補遺1-2)
[081/H 27/補1-2]

山科教言[著]；日井信義、嗣永芳照[校訂]
『教言卿記』
[210.088/Sh 892]

辻惟雄[著]
『奇想の図譜：からくり・若冲・かざり』
[721.02/Ts 41]
[081/C 441/TSU 7-2]

辻惟雄[著]
『日本美術の見方』
[702.1/I 95/7]

美術、見世物、作り物をめぐる本

時々研究室を訪ねてきた学生さんに「先生、この本全部読んだのですか?」と聞かれることがある。もちろん全部は読んでいません。とりあえず手元があれば安心と、買ってバラバラと見てそのまま本棚にしまったままという本もあるし、そもそも最初から最後まで読みとおすという使い方をしない本もある。

日本美術史を専門にしている私にとって、図版が多く掲載されている美術全集や展覧会カタログは、かさばるしどんどん増えるので収納に悩むことになるのだが、やはり手元に置いておきたいものである。ある作品を確認しなければいけない時、あの作品の写真はあの本のあそこに載っていた、または載っていそうという記憶が、一つの財産となる。近年はインターネット上で美術館・博物館の所蔵品などは（時には高精細の）画像を見ることができるようになってきたが、まだまだそれだけでは足りないのである。

このように図版を見るというのが主目的になりがちなのであるが、これらの書物の図版も誰かが作品を選び配列し作り上げたものだ。例えばいわゆる日本美術全集といったようなこの図書館にもあり、一応一般向けとされているような全集ものでも、昔のものと近年のものでは選ばれている作品には、かなりの変動がある。40数年前に初版が出版された『原色日本の美術』（小学館）と、約20年前に出版された『日本美術全集』（講談社）、現在刊行中の『日本美術全集』（小学館）を見比べてみると、もちろん昔からいわゆる名品として掲載され続けている作品もある一方、新たに発見されたり評価されたりして掲載されるようになった作品もある。例えば『日本美術全集』（小学館）の最新刊である第16巻「激動期の美術（幕末から明治時代前期）」では、函に生人形の写真が大きくクローズアップされ、ページを繰ると2点の生人形がカラー図版で紹介されている。『原色日本の美術』の時代には、生人形が美術全集に載るなどとは考えられなかったであろう。そもそもこれらは「美術」の範疇にはいかなかった。

生人形とは幕末から明治初めにかけてつくられた等身大の精巧な人形である。まるで生きているようだということで、生人形と呼ばれ、様々なテーマで作られた人形は各地の見世物興行で人気を博した（と言ってもなかなかイメージしづらいであろう。ぜひ前掲書の図版を見てほしい）。私が生人形について初めて知ったのは、木下直之氏の『美術という見世物』（平凡社、1993年）を読んでであったと思う。この本は私が「ドキドキしながら読んだ美術の本ベスト3」に入と思うが、江戸から明治に時代が移り「美術」という新しい概念やそれにまつわる制度が西洋から入ってくる中で、そこからこぼれおちていった様々な造形物があったことを教えてくれる。生人形もその一つであったわけである。最新刊の『日本美術全集』は、一度「美術」から外れた生人形を同じ土俵にもう一度上がらせたいと言えよう。ただ私が自分の専門である室町時代との関連で興味を持ったのは、同じ見世物でも「細工見世物」と呼ばれるものであった。

細工見世物とはやはり江戸時代後期に人気を博した見世物で、籠なら籠で例えば巨大な釈迦涅槃像を作ってしまった、さまざまな乾物類を組み合わせで不動明王などを作ってしまった、生人形のリアリズムとは対極の造形物である。しかしこれは平安時代以来の「作り物」文化を継承している。まだ大学院生だった頃、後崇光院の日記である『看聞御記』や山科教言の日記『教言卿記』といった室町時代の公家日記を初めて読み、その豊穣というかわけのわからない世界にびっくりしたことがある。特に面白かったのは風流の作り物と呼ばれる様々な行事の場や祭礼を飾った造形物であった。例えば『看聞御記』の応永23年（1416）3月7日条には茶会に用意された「風流懸物」についての記述が見られるが、それは精進物（野菜）で作られた大黒天であったり、やはり食物で作られた官人であったり、銭、扇、織物などで作られた車などであった。まさに江戸時代の細工見世物につながるものである。一方このようなものが楽しめた同じ場所には、屏風が立てめぐられ、掛軸がかけられ、花瓶には花が飾られていた。今私たちが美術品として見ているものが、どのような場でどのように楽しまれていたのか、これらの日記を読むことで実感をもって考えることができるようになった。また当時の人たちが楽しみ、飾っていたものが、今美術として見られているものだけではないこともわかるようになった。

なかなか漢文の日記を読むのは難しいかもしれないが、辻惟雄氏が「かざり」という言葉を日本美術を読み解く一つのキーワードとされた、『奇想の図譜：からくり・若冲・かざり』（平凡社、1989年）、『日本美術の見方』岩波日本美術のながれ7（岩波書店、1992年）などを読んでいただくと、その一端は伺えるであろう。今回とりあげた本は、ほとんど私が20代から30代初め頃に出会った本である。当時のわくわく感を少し思いだした。



デザイン学部 生産造形学科 教授

田邊 英隆

Tanabe Hidetaka

本文中に登場した資料

ジュール・ベルヌ[作]: 白木茂ほか[訳]
『海底二万マイル』
『月世界旅行』
『八十日間世界一周』
『地底の探検』
『うごく島の秘密』
(少年少女ベルヌ科学名作全集)
[953/V 62]

コナン・ドイル[著]: 龍口直太郎[訳]
『失われた世界』
[933.6/D 89]

コリン・ウィルソン[著]: 中村保男[訳]
『アウトサイダー』
[934.7/W 75/1~2]

ドストエフスキー[著]: 木村浩[訳]
『白痴』
[983/D 88/1~2]

ドストエフスキー[著]: 江川卓[訳]
『悪霊』
[983/D 88/1~2]

ドストエフスキー[著]: 原卓也[訳]
『賭博者』
[983/D 88]

ドストエフスキー[著]: 工藤精一郎[訳]
『死の家の記録』
[983/D 88]

稲本正[著]
『緑の生活: アハートオブオーク』
[750.21/O 57]

H.D.ソロー[著]: 飯田実[訳]
『森の生活: ウォールデン』
[081/I 95/R307-1,2]

アーサー・オードヒューム[著]: 高田紀代志ほか[訳]
『永久運動の夢』
[081/A 82/328]

人生の岐路で舵を切った本

自分の人生を今から思い返してみると、自分の選んで来た道の岐路で影響を与えられた本というものがあるか有ると思えます。それらに絶対的影響を受けたとまでは思えないにしろ迷っていた時に力強く出会った本、そんな本数冊に付いて書いてみたいと思います。

高校二年の時に出会ったコリン・ウィルソン著『アウトサイダー』とそこから導かれたドストエフスキーの著作群。一般に『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』が有名ですが、ここでは二冊を対比させて読む事の面白さで『白痴』『悪霊』を挙げておきます。

二十代後半に出会った本は稲本正著『緑の生活』

そして三十代後半に出会った本はアーサー・オードヒューム著『永久運動の夢』

そんな本に付いて語りたいと思いますが、まずは自分の子供の頃から話を始めます。

私は幼い頃から工作好きで、プラモデルでは飽き足らず、工夫して模型を自作する事が日常でした。親や周りから「この子は理工科系だね」と言われて育ち、また自分でもそう思っていました。ただ本を読むのも好きで、小学校の頃から図書館にて借り、多くの本を読んできました。小学生の頃はトム・ソーヤーやハックルベリーなどの冒険もの、ルパンやシャーロック・ホームズなどの推理もの、探偵小説など。そして何よりジュール・ベルヌのSF小説。『海底二万マイル』『月世界旅行』『80日間世界一周』『地底旅行』『動く島』など、現在では全て実現している事がすごいですね。コナン・ドイルの『失われた世界』は映画ジュラシックパークなどの基になったようです。

中学生になると教科書に出て来るような純文学作家の本を手当たり次第読んでいました。夏目漱石、芥川龍之介、武者小路実篤、山本有三、有島武郎、など。高校生との境目は曖昧ですが、太宰治、宮沢賢治、三島由紀夫、安部公房、大江健三郎など、そんなおりに三島由紀夫は自衛隊基地にて割腹自殺しました、訳が分かりませんでした。

高校二年の時、理工系に進路を定めている自分と、同じ進路の周りの者との間に違和感があり、迷いを感じ始めました。その時担任の先生だった芸大の油絵科卒業の美術教師に作文でその事を伝えた所、貸していただいたのがコリン・ウィルソン著『アウトサイダー』と言う本でした。当時イギリスで、評判になった本なのですが高校生にはとても難解な書物でした。多くの作家の作品を評論的に次から次へと紹介しながら自説を展開していくスタイルで、世界には覚醒したアウトサイダーと呼ばれるような種族がいてそれらが人類を深淵まで導くというような説が、目眩くような強靱な文体で展開されていました。

そこで紹介された実存主義的な作家、その作家たちとの出会いから大きな影響を受けました。ニーチェ、サルトル、カミュ、そしてドストエフスキー。ドストエフスキー体験という言葉が有るようにドストエフスキーと出会う事は特別であると語る人は多く、資料によると黒澤明、手塚治虫、村上春樹などの名前もあがっています。私にも特別な事でした。

私には文学評論は出来ませんが、ドストエフスキーの持つ特別な事柄は伝えられます、まず彼は癲癇持ちで、癲癇を起こす狭間で別の世界を見たとも言われています。『白痴』の主人公ムイシュキンも癲癇持ちです。また賭博中毒で実生活を顧みず、いつも借金まみれの追われるような著作活動をしていた事も知られ『賭博者』という著作もあります。政治的集会に参加した事で捕まり死刑を宣告され、死刑台につながられ実際に銃殺される直前まで追いつめられた後、恩赦されシベリアに流刑。その経験は『死の家の記録』に記されています。

その後、私は大学受験を芸大志望に変えました。ただの工作好きがクリエーションに繋がる道に進みたいと感じたからです。そして工業デザインの世界に出会いました。

二十代後半、デザイン会社の開発部に所属しながら、なかなか商品を開発できない事に悶々としていた日々に、稲本正著『緑の生活』という本と出会いました。それは5人の若者が木工で事業を興そうと職業訓練校で木工を習い、飛騨の清見村(当時)に工房を構えオークヴィレッジと名乗り、木工家具展示会として異例の新宿紀伊國屋書店にて工房デビューを果たすまでの苦労話を綴った本です。その後工房は大きく発展を続け現在では飛騨でも著名な、若者の進路志望先としても人気の工房となっています。また当時から森の保全、環境保全運動にも力を入れています。

その本と出会ってからしばらく、私は「これから木工をやって行きます」と宣言してデザイン会社を辞めました。その後この大学で木工の出来るデザイナーとして教員をやらせていただいているのもこの本が遠因となっていると思います。

なお良く似たタイトルで1854年に書かれたデヴィット・ソロー著の『森の生活』という本があります。アメリカ、ウォールデン湖畔の自然の中で2年2ヶ月に渡って自給自足の生活を送った経験から著された先駆的な環境保護運動の書として有名です。1854年と言えば日本では江戸時代、その頃に環境保護運動とはすごい事です。

アーサー・オードヒューム著『永久運動の夢』。新聞広告でこの本のタイトルを見て飛び出すように本屋に行ったら行った事を思い出します。蒸気機関が発明され産業革命が起きる前に、なんとか風力や水力に頼らずにエネルギーを生み続ける機関が作れないかと真剣に取り組まれた時代があったこと。その悉くは失敗し失意のうちに落ちぶれる者、徒労に人生を費やす者、不可能と分かり開き直って詐欺師となる者、ついには最初から詐欺をするつもりで富豪から金銭をむしり取る者など。この不毛な開発に関わる人々があまりにも多い事に興味を持った著者がまとめた本です。

私もこの徒労に強く惹かれます。残りの人生をこれに費やしてもいいと思っています。ただしからくり木工作品として、種も仕掛けも仕組みだトリックアートとして。

『非道に生きる』

園子温[著]
朝日出版社, 2012.10
[778.21/So 44]



『愛のむきだし』『冷たい熱帯魚』『ヒミズ』などの衝撃作で、賛否両論を巻き起こし、世界的にも高い評価を受けている鬼才映画監督、園子温。2012年に公開した『希望の国』では、タブーである原発問題に真っ向から挑み、事故に翻弄される家族を描いたことで、大きな話題となりました。最近では、最新作『地獄でなぜ悪い』がトロント国際映画祭で日本人初の観客賞を受賞するなど、いま最も勢いのある映画監督の1人です。

『他の人と同じ考え方をするために生きるのなら、生まれなくてもよかったとさえ思います。少しでも面白くないと自分が思うことは一切やらない。それを他人が「非道」と呼ぼうが、知ったこっちゃない。』

彼のこのような考え方が、そのまま映画制作にも繋がっています。彼の作る映画は、常識や型に縛られることがなく、毎回違った顔を見せます。面白い、やりたいと思ったら、ためらわずに自分を信じて疾走し続けるという彼の精神が、そのまま突き抜けた作風に表れるのだと思います。

しかし彼の人生も、映画に負けず劣らず、過激で濃厚なものです。本書では、彼が生まれてから、映画監督として歩むまでのめまぐるしい半生が書かれています。17歳のときに、家出した先で出会った女性の実家に行き、旦那になりすまして生活した話、路上パフォーマンス集団「東京ガガガ」を結成し、渋谷のスクランブル交差点を占拠しようとした話など、驚くべきエピソードが満載です。

瞬間を無駄にしない彼の生き様には、圧倒されると同時に、強いメッセージ性を感じられます。「自分の考えを実行できているか」、「惰性で今を生きていないか」など、読後には自らの思想や生き方と向き合わざるを得なくなります。

「園子温の映画ってちょっと…」と敬遠している人や、現在の生き方に迷いが生じている人にこそ、この本をオススメします。彼のぶっとんだ生き方を、是非感じて下さい。

【文化政策学部 芸術文化学科 4年 北島 夕真】

大学に入学したばかりの頃、私は自分に教養がないことを自負していたので、教養を身につけたいと今まで利用してこなかった図書館へと足を運び本を読んで見ることになりました。しかし何を読めばいいのか…。そのとき目に入ったのが図書館の柱に貼ってあった『温故知新』に掲載された推薦図書の一覧でした。中でも教養という面で強そうな元学長の川勝平太知事のオススメを読んで見ることになりました。

それがロマン・ロランの「ピエールとリュース」です。ロマン・ロランって名前からきくとロマンチックな作品でロマンチストな私にピッタリだな、なんて変な思い込みで手にとった本でしたが、読みはじめてみるとその美しさに心を奪われてしまいました。本の内容に対して美しさを感じたのは初めての経験でした。文章で綴られている情景が頭の中で流れるのですが、この世界の透明感のある淡い空気感がとても心地よいのです。舞台は第一次世界大戦下のパリ、戦争という生々しい状況と対比され、より清らかな情景が現れます。良家の息子ピエールと、生活費を稼ぐための絵を画くリュース、文による描写だけでその美しい容姿が目につかびいい声で会話が聞こえてくるようです。

私は人間不信なところがあって、恋愛経験もないものですから、恋してる愛してると言ってる人はどんなことを思っているのだろうか、と考えることがあります。そんな不信感を持った私が好きな人に対する純粋な愛情を感じ、心ときめかせてしまいました。また、ヒロインの愛し方が母性的でこんな愛し方があることに気付かされて自分の思想の浅さを実感しました。二人が戯れている姿は幻想的でうっとりさせられるのですが、儚い結末の予感から悲しい感情が呼び起こされます。美しければ美しいほど切なく、涙で目を腫らしながら読み終えました。

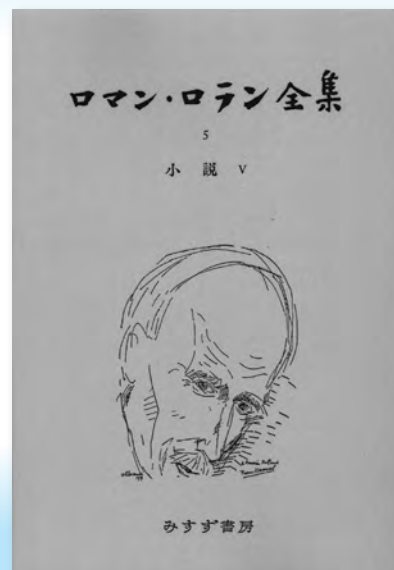
65ページほどの短篇で軽く読むことができます。少し背伸びをして高尚な文学に触れてみようと考えてる人に推薦したいです。

【デザイン学部 生産造形学科 4年 牛田 有紀】

『コラ・ブルニョン; ピエールとリュース; クレランボー』(ロマン・ロラン全集; 5)

ロマン・ロラン[著]; 宮本正清[訳]
みすず書房, 1979.11

[958.78/R 64/5]
(※表紙画像は現在刊行中のオンデマンド版)



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

「好きな1冊を」とのお話をいただきましたが、1冊だけを選ぶのはなかなか難しいことです。結局17冊になってしまいました。でも、選んだのは全集なので、大目に見ていただきたいと思います。

ご紹介するのは、1955～56年に岩波書店から刊行された「志賀直哉全集」です。ポケットに入る大きさの本17冊に、小説、随筆、日記、書簡等、それまでの彼の書き物がほとんど網羅されています。非常にすっきりした装丁で、編集者による解説も一切無く、彼の文体の形容によく使われる「無駄のない」感じがそのまま本になったようです。

没後にも全集が2回刊行されていて、それぞれ充実した内容なのですが、持ち歩くには全く不向きな、いかにも全集らしい大きさになってしまいました。ここで紹介する全集の最もありがたい点は、小さいので通勤（通学）中でも読めるということだと思います。旧漢字が使われているので、若い人には少々読みにくいかもかもしれませんが、私などにはちょっと懐かしい感じがしてかえって親しみやすく思えます。ときどき見たことのない古い漢字が出てきたりしますが、それを調べるのも楽しみになります。

私は、元々本好きの割に小説をほとんど読まないのですが、志賀直哉だけは特別で、なぜか愛読しています。その理由を考えてみると、「文章が簡潔で読みやすいこと」「短編が中心であること」「多くの作品から上品なユーモアが感じられること」

「一般の小説にありがちな作り物・揶揄物の感覚が少なく、本人や周囲の人々の人間像を理解しながら読むことで、作品を立体的に楽しめること」等が思い当たります。私が特に好きなのは、家族や動物のことを扱った小品です。

志賀直哉は、昭和時代に最も尊敬を集めた作家と言えるでしょう。小説家だけでなく、ジャーナリストも彼の文章を参考にしたと言われています。文章力を向上させたいと考える学生の皆さんにも、たまには志賀直哉を読んでみることを薦めたいと思います。彼の文章から新鮮なヒントが見つかるのではないのでしょうか。

【デザイン学部 メディア造形学科 教授 的場 ひろし】

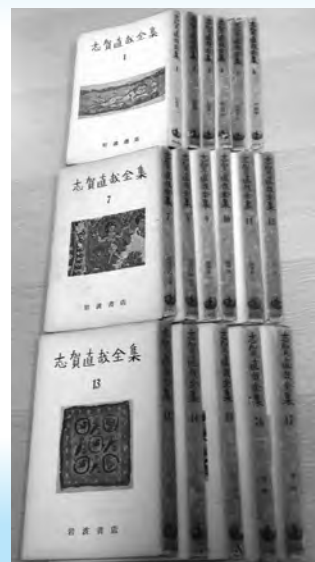
「志賀直哉全集」

志賀直哉[著]

岩波書店, 1955-1956

[918.68/Sh 27-1/1～16]

(※請求記号は、本学所蔵の1973～1984年刊行の全集全15巻・別巻1巻)



『地図で見る百年前の日本』

『地図で見る百年前の日本』編集委員会[編集]
小学館, 1998.8

[291.038/C 49]



この本には明治から大正にかけての日本の地図が収められています。主要なページで紹介されているのは、その中でも最初期にあたる明治前期に作成された関東地方の彩色実測図です。これらの地図の美しい彩色は、地図の作成にあたって、フランスの方式を採用したために施されたものですが、その後のドイツ式の1色刷りに変更された地図に比べて、土地の様子をはるかに豊かに伝えてくれています。

印象としてはドイツ式の地図が『街や地形』をそのテーマとしているのに対して、フランス式は『街と地形および自然』までを表現しているように見えるのです。そしてそのことを示すようにフランス式の彩色図は、都市が主要になっている地域よりも、自然と都市が共存する地域において、より活き活きとした表情を見せてくれます。例えば東京湾の沿岸部を描いた千葉や品川あるいは横浜の地図では、潮汐の様子までもが目に見えるようです。またところどころに挿入されているスケッチも、当時の風景を私達に教えてくれます。

このように、この本に収録された地図には当時の日本の自然と街とが、いかにお互いに調和して共存していたかが記録されていますが、それは江戸時代から営々と街や田畑を造り、守ってきた人達と、明治期に入って当時最高の技術をもってそれらを記録した技術者の共同作業の結果であると考えられることもできます。

明治の前期といえば、夏目漱石が東京で学生時代を過ごした時期でもあります。私は図書館の中で、何度か漱石の本と出会い、色々なことを学びましたが、彼とこれらの地図を作った技術者が、地図上のどこかですれ違っていたかもしれない、と考えるのも楽しい想像です。そしてそのような機会を与えてくれたこの本との出会いもまた、図書館の中での出来事でした。皆さんも古今の名作との出会いを求めて、図書館散策に出かけられてはいかがでしょうか。

【デザイン学部 空間造形学科 准教授 花澤 信太郎】

『ベトナムのラスト・エンペラー』

ファム・カク・ホエ[著]; 白石昌也[訳]
平凡社, 1995.1
[223.1/P 51]



今回の特集に当たり、「おすすめ」というニュアンスとは異なるかもしれませんが、標記の書籍を紹介します。「ベトナムのラスト・エンペラー」はベトナム最後の王朝阮(グエン)朝の第13代皇帝バオダイを指しています(19世紀にベトナムに対するフランスの支配が開始された後も阮朝は名目的に存続していました)。ただし、これはバオダイの伝記として書かれたものではありません。訳書の題名からは同書の内容や意義が想像しにくいと思われるので、この機会に紹介を試みます。

ベトナム語で書かれた原書の題は、日本語訳すれば「フエ朝廷からベトバク戦区まで：回想録」です。「フエ朝廷」はフエを都とする阮朝の朝廷を指し、「ベトバク戦区」は第1次インドシナ戦争期にベトナム民主共和国が根拠地としたベトナム北東部の地域を指します。原書は、フエ朝廷の宮中官房長官であったファム・カク・ホエの1945年3月から1947年9月までの時期の回想録です。ここには、著者が、1945年3月の日本軍によるいわゆる仏印武力処理から日本の降伏に至る緊迫する情勢の中でフエ朝廷の側からベトミン(ベトナム民主共和国建国の中心勢力)の運動に呼応してバオダイの退位工作に関わり、民主共和国政府に参画して対フランス交渉に参加した後、第1次インドシナ戦争に際してフランスによって拘束され、それを脱してベトバクの民主共和国勢力に合流するまでの動向が記されています。

著者は民主共和国およびそれを継承したベトナム社会主義共和国で要職にあった人なので、同書で言及されている様々な人物や事件についての評価は、そうした著者の立場を反映したものであって、普遍的に受け入れられるものではないかもしれません。また、回想録というものの性質上、事実関係については他の史料と照らし合わせて確認する必要もあります。しかしながら、ここに記されたのはベトナム史に画期をなす時期であり、著者のような立場の人物が当時どのような経験をしたのか、また、この時期がそうした著者の視点からどのように描かれるのかを知ることは、ベトナム現代史への理解を深める上で意味のあることでしょう。

【文化政策学部 国際文化学科 准教授 岡田 建志】

南條史生氏は、現在、東京、森美術館の館長を務める日本の現代美術界を代表する名キュレーターです。大学卒業後、就職した銀行を一年で退職して、美術の世界を選んだ南條氏は、国際交流基金を経て1990年ナンジョウ・アンド・アソシエイツを設立しました。以来、展覧会、パブリックアート、各国の国際アートビエンナーレやトリエンナーレのディレクションまで、長年現代アートのプロデュースに携わってきました。1999年に静岡市のグランシップの開館記念事業として、韓国のイ・ブル、中村哲也、草間彌生ら30作家のバルーン作品を披露したバルーン・アートフェスティバルも南條氏のオリジナリティ溢れる仕事です。

この本は、『美術から都市へ——インディペンデント・キュレーター15年の軌跡』(鹿島出版会、1997年)、『疾走するアジア——現代アートの今を見る』(美術年鑑社、2010年)に続き、南條氏が世界のアーティストと彼らの作品、クライアント、キュレーターとのエピソードを綴った3冊目の著作です。ここには現代アートにかけける情熱、展覧会づくりの奥義が惜しみなく披露されていて、実にエキサイティングです。とりわけ、内藤礼の作品の独特の公開方法が話題をよんだ1997年のヴェネツィア・ビエンナーレ日本館、オノ・ヨーコの《貨物車》や椿昇の巨大バックといった作品が注目を集めた2001年横浜ビエンナーレなど、数々の国際プロジェクトにおける舞台裏の回顧を興味深く読みました。「日本が今売るべきものは美学である」という言葉からは、世界の観客を相手に現代アートを発信するなかで培った、鋭い視点と広い見識で、日本の都市と社会の未来を見据えてきた氏の一貫した姿勢がうかがわれ、我々を勇気づけてくれます。

本学で学ぶ学生のなかには、将来、文化創造の第一線で活躍することを希望する者も多くいるでしょう。そんな諸君にぜひ手にとってもらいたい1冊です。

【文化政策学部 芸術文化学科 准教授 立入 正之】

『アートを生きる』

南條史生[著]
角川書店, 2012.3
[706.9/N 48]



南 條 史 生

角 川 書 店

特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

今回、私が皆さんにご紹介したい「わたしの一冊」は、戸田山和久著の「論文の教室—レポートから卒論まで」です。本書は、初めて論文を作成する学生を対象に、そもそも論文とは何か、ということから論文の体裁を作り上げるまでの過程を懇切丁寧に説明してくれる、いわゆるHow to write論文本です。

私は、論文を作成するにあたり、論文の書き方に関する様々な本を読み漁りましたが、自分に合う本を見つけられずにいました。そんな中、悩んでいる私に友人が薦めてくれたのが、この本でした。その場で、バラバラと読ませてもらったら、なんと読みやすいこと。気付けば、私はAmazonのページを開いて注文していました。

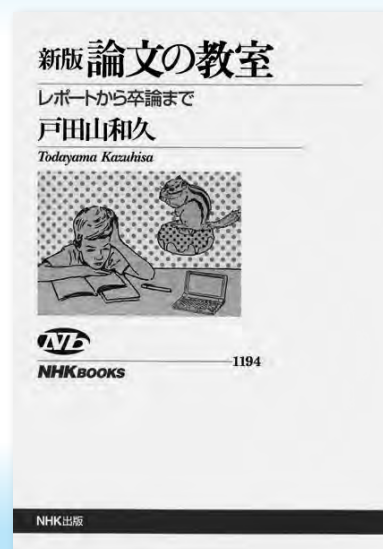
本書は「作文ヘタ夫くん」というキャラクターに、著者が対談形式で論文の書き方を伝授するといったかたちで展開していくのですが、本当にNHKブックスなのかと疑うくらい、ユーモア溢れる内容にページをめくる手が止まりませんでした。(本当です。) また、随所に、図解や練習問題も用意されているため、適宜、自分の理解度を確認することができます。読めば読むほど、自分がいかにこれまで残念な文章を書いて生きてきたかということを思い知らされますが、以前より論文やレポートに対する苦手意識が無くなったのを実感しています。そして、本の説明のとおり、実践することで、文章を書くことが苦手な私でも、少しは相手に伝わる論文が書けるのではないかと淡い期待も持たせてくれます。

文章は、学生に限らず、社会人になっても書く機会は多々あることと思います。その際に、焦ることがないよう、恥じることがないよう、本書はこの先もずっと手元に置いておきたい一冊です。なので、論文やレポートの作成に困っているという学生の方(もちろん社会人の方)に、本書は一読の価値があると声を大にして言いたいです。本は出逢った者勝ちだと思います。さあ、急いで大学図書館へ。

【大学院 文化政策研究科 2年 山口 典子】

『論文の教室: レポートから卒論まで』(新版)

戸田山和久[著]
NHK出版, 2012.8
[816.5/To 17]



『シンドラーズ・リスト: 1200人のユダヤ人を救った ドイツ人』

トマス・キニーリー[著]; 幾野宏[訳]
新潮社, 1989.1
[933/Ke 43]



高校生の時、世界史の授業で最も興味を持ったのは、ドイツの近現代史でした。ドイツは二度の世界大戦で、いずれも酷い負け方をします。「どうして2回も…」という疑問から、戦間期のドイツ史を扱った本を読む中で出会ったのが、この1冊でした。

この本は、実際に起きたことをまとめたノンフィクションですが、文体は小説のように書かれ、主人公オスカー・シンドラーの物語を読むような感覚に陥ります。文庫本で600ページを超える大作ですが、思いのほか読みやすかったのを覚えています。

ナチスによるユダヤ人への過酷な迫害は、『アンネの日記』など他の本や資料映像で知ってはいましたが、この本ではその様子が生々しく描写され、非常に衝撃的でした。また、アウシュヴィッツなどの強制収容所には、ユダヤ人の労働力をただ同然で利用してぼろ儲けしようとする意図が含まれていたことを、この本で初めて知りました。シンドラーも、当初はまさにそれを企てた1人だったのですが、収容所での残虐行為に次第に疑念を抱き、儲けた金をユダヤ人の救出に充てるようになります。彼の心変わりしていく様に、ぐいぐいと引き込まれました。

当時のドイツ社会で、実権を握ったナチスに歯向えばどのようなことになるか、想像に難くありません。そんな中で、シンドラーは権力への従順を装いつつ、千人を超える命を死から救います。まさに、自らの命を懸けた救出劇でした。

大学生の時、この本をもとに映画化された『シンドラーのリスト』を見ました。第66回アカデミー賞で作品賞など7部門を受賞した、スティーヴン・スピルバーグ監督の名作です。こんなに感動し、泣いた映画は他にありません。そして「もう少しドイツ近現代史を勉強してみようかな」と思い立ちました。この本は、ちょうど進路に迷っていた頃、社会に出る前に寄り道することにしたきっかけを与えてくれたのです。

【図書館・情報センター(情報室 図書係) 井出 直樹】

「静岡文化芸術大学学術リポジトリ」を公開！



2013年9月25日に「静岡文化芸術大学学術リポジトリ」を学外へ公開しました。

学術リポジトリとは、静岡文化芸術大学で創られた教育成果や学術研究成果を社会に還元することで、学術研究や地域社会に貢献するために、電子的な形態で収集・保存、原則無料で公開発信するインターネット上のシステムです。

本学発行の『静岡文化芸術大学研究紀要』を始め、ニュースレター、特別研究の報告書、本学の教員の学術論文、教材等を提供しています。

学術リポジトリにアクセスするには、図書館・情報センターのWebサイトにあるをクリックしてください。(URLは<https://suac.repo.nii.ac.jp/>です。)

※本学の学術リポジトリは、国立情報学研究所が提供する共用リポジトリサービス(JAIRO Cloud)を用いています。



ユニバーサルデザイン絵本コンクール2013を開催しました

ユニバーサルデザインを理念の一つとしている静岡文化芸術大学では、身体的・知的特性、年齢、そして文化などを越えて、皆が一緒に楽しむことのできる絵本、ユニバーサルデザインの考え方を採り入れた絵本を募集し、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2013」を開催しました。受賞作品は以下のとおりです。多数のご応募ありがとうございました。

- 大賞 (該当作品なし)
- ユニバーサルデザイン研究賞 (該当作品なし)
- 優秀賞

【子ども部門】

「なにのせん?」(浜松市立富塚小学校4年 森内 祐歌)
 「すてねこ」(袋井市立袋井中学校2年 前田 和花奈)
 「見て！感じて！私たちが作った布絵本☆」
 (宇城市中央図書館子ども布えほん)

【高校生部門】

「つくるえほん」(愛知県立豊橋西高等学校3年 佐藤 圭祐)

【大学生部門】

「タカとハルの江の島のたび〜小田急ロマンスカーにのって〜」
 (専修大学アクセシブルメディア研究会：文学部野口ゼミナール)

■佳作

「わたしたち まち ユニバーサルデザイン」
 (静岡県立吉原高等学校3年 伊藤 知穂)

※受賞者の敬称は省略させて頂きました。



なにのせん?



すてねこ



見て！感じて！私たちが作った布絵本☆



つくるえほん



タカとハルの江の島のたび



わたしたちまちユニバーサルデザイン